究極的には何を求めて、能率、効率を追うのだろうか？

知的障害者のＡ作業所の菓子箱に詰められたお菓子（バウンドケーキ等）をいただいた。一つ一つが真空パックされており、早速賞味したところ、美味しかった。以前にＢ作業所のお菓子もいただいたが、一つ一つ包装されビニールテープで留められていたものであった。Ｂ作業所もＡ作業所のように真空パックした方が、衛生的だし正味期間も長くていいのでないかと、単純に思った。

そこで、Ｂ作業所にこの話をすると、管理者はオート機械導入を勧めるが、オートメで真空パックするより、衛生に配慮しつつ、一つ一つ包装することの方が利用者の一人一人の作業参加となるので、スタッフはあえてオートメに同意しないとか。また、真空パックは確かに正味期間が長くて販売ルートも拡がるが、あれこれ考え併せた上で利用者の作業参加を大事に考え､販売ルートが狭まることは現在のところ二の次と考えているとのこと。

傍目では分からないスタッフの利用者への想いが、こうした包装一つにもあることを初めて知った。

一方、今の日本は人の手数を省くために、あらゆる分野で出来るだけオートメの風潮。野菜とて、包装、梱包、輸送のことからコストダウンを考えてサイズ規格もので統一しがち。曲がったキューリでは包装もし難いし、梱包も余分なスペースを取るし、輸送も量的に少なくなるしね。先の台風被害で生鮮野菜の品不足で高値の折、大臣が規格外の野菜も市場に出すようにコメントしたことからも、如何に世の中規格品が氾濫しているかが分かる。

こうした風潮、社会の市場システムが無意識の内に、我々に規格外はじくもの、はじかれるものとの意識が浸透しているのでないだろうか。そうした無意識の意識の元では､「障害」ということはどう理解されているのであろうか。また、最近よく聞く「みんなちがって　みんないい」というような言葉が、本当にその意味する内容を理解・納得して使っているのであれば、ではなぜ、人は流行に後れまいとするのだろうか。

Ｂ作業所の取り組みの想いを聞いて、自らの反省も含め、一人一人が労働するということはどういうことか、規格とは何故に必要なことなのか、能率、効率を求めるとはどういうことか、等々を考えさせられてる。

「障害児問題への取り組みは、社会の意識改革、価値観変換への作業。常に念頭に置くように！」という先輩の教えが、改めてずしりと、のしかかって来る。

（2004 年 11 月 23 日　記）